

2011年9月21日

ヤクルト本社とダノンによる 2011年のプロバイオティクス研究助成受賞者が決定

株式会社ヤクルト本社(代表取締役会長CEO 堀 澄也)とダノン(フランス、会長兼CEO フランク・リブー)が設立した「グローバルプロバイオティクス委員会」では、米国内でプロバイオティクス研究※に携わる若手研究者を対象とした研究助成を公募し、厳正なる審査の結果、以下の2名を2011年の研究助成受賞者として決定しました。

この研究助成は、米国におけるプロバイオティクス研究の進展およびプロバイオティクス研究機関とのネットワーク構築を目的に、2008年から行っているものです。当社とダノンでは、今後も研究助成を継続的に行い、米国におけるプロバイオティクス研究の発展に寄与していきます。なお、研究助成受賞者と研究テーマの概要は、下記のとおりです。

※腸内細菌の基礎および腸内細菌と健康や病気とのかかわりについての研究

記

1. 研究助成受賞者と研究テーマ

(1) エリック マーテン博士 (ミシガン大学)

研究テーマ：「腸内常在細菌の粘膜層定着に対する宿主反応」

ある種の常在細菌は、腸管粘膜層に存在し、腸管の細胞に近接することによって腸の健康に優れた影響を及ぼすことが考えられています。本研究では、これらの細菌種が腸の健康に影響を及ぼす粘膜非存在化の常在細菌との相違を調べる予定です。この新しいアプローチは、炎症性腸疾患のような病態時に腸内細菌種が防御的にまたは促進的に作用するのかを解明する手掛かりとなるかもしれません。

(2) スザンヌ ノーブル博士 (カリフォルニア大学)

研究テーマ：「健常時および病態時における腸管常在細菌(腸内細菌)とカンジダ・アルビカンス真菌との相互作用の解明」

本研究は、腸の常在細菌がヒトの健康、もしくは病気に関与するという仮説を実証するものです。ノーブル博士は、腸管内の常在菌であるカンジダ・アルビカンスが病原性を発揮することから、カンジダ・アルビカンスが腸内常在細菌とどのように相互作用を及ぼすのかを、分子レベルで検討する予定です。腸内常在細菌によるカンジダ・アルビカンスの病原性低減作用を明らかにすることにより、このような細菌を将来的に真菌(カンジダ・アルビカンス)感染防御のためのプロバイオティクスとして開発する可能性も考えられます。

2. 研究助成期間

2011年7月から1年間

3. 選考委員会

4名の選考委員が、新規性、独創性、発展性などの点から評価しました。

W.アラン・ウォーカー博士(ハーバード医科大学)

メアリー・エレン・サンダース博士(国際プロバイオティクス&プレバイオティクス科学協会)

バルフォア・サルトル博士(ノースカロライナ大学)

リチャード・ゲラン博士(バージニア大学)

4. 研究助成金

1件当たり5万USドル、総額で10万USドルです。

ヤクルト本社とダノンが半額ずつ助成します。

【参考】

1. グローバルプロバイオティクス委員会について

世界中においてプロバイオティクスの認知・理解を協同で促進することを目的に、当社とダノンにより2004年に設立されました。

当委員会は、当社とダノンの両社から選任された合計6名(各社3名)の委員によって、年2回、それぞれ日本とフランスで開催されています。

2. 米国におけるヤクルト本社の事業展開について

米国における「ヤクルト」の本格販売は、アメリカヤクルト株式会社が2007年にカリフォルニア州で開始しました。現在では、カリフォルニア州をはじめ、ネバタ州、アリゾナ州、テキサス州、コロラド州、ニューメキシコ州を中心にスーパー等の店頭で販売しています。2010年6月、将来の工場建設に備え、カリフォルニア州に用地を購入しました。

販売実績は2010年度で約107,000本/日(前年比20.0%増)、2011年8月度で約127,000本/日と順調に伸長しています。